明星抄

胡蝶　螢　常夏

篝火　野分　十一

彰考館文庫

胡蝶　十七日　初音の巻の後の年

新造の四町の年なれば
ちかう余れるよろづ遍くめぐ
らすやうにもとも山ゐのさまの
ひるまもとまれるはいかやうの花ぞ
と問ふ　春の盛りなる所より行きて
も移してみまほしき人くもちらばへて
私とは思はせて世間(ケイカン)笑はるるも
恥ずかしの人

明明徳三年七月

中宮ハ天の川　秋好や
かの書続きの　花
ひかりやとおもし　忠よ乃人之
おとこの恋　涼の人之
はるそまうしてうろうろ　明し六条院の
中よ今中宮の中し海せともうろうろ
ひま人没脈めるるみえてまきさとて前乃中
宮のとろうやうよ同院中にてもるやと
く後とほのぬ気に粉はまてかんへ帰るる
とまん
まう紀女房　中宮乃派ま乃女房之

南乃池のこなたよ　東中乃町と南ゆたか
おとゞのおまへより渡せる之
ちいさき山をへだての　中将めるところ
まき見ゑて浦よりぬるやうなれども
あまくさは旅ゞひとりするとて
となりしようし
はるもの　亭主なもと之
こなたのはる紀人く　忠よ乃まえ女房衆
宮よりま閑し給ふのらてめそゞ之
胡蝶鷂翁　前よ加ゝめつゝあと云もは
事ぞ胡ろくのかとよら来絵にや蔵よまうる地

たち鶯を風流の
海の入江　花へうけてとんでゆく山の春の中
海の入江　海の入江　ふりとゆくものとみるけて見ん
かしこの感ずる
妙や　花ちる春の雪の面
高砂めぐる　文集繞廊　紫藤架　夾砌紅
藥欄
風ふけも　山吹の春の花は過ぬ　ひ
ふる歌よもみしひ歌ともの中の
ぬる人くの蘭のおとの人の歌ん花
ちるさして雅ともの

ゆめのうつつの　文集の白氏の引歌の不
老不死の菜の花　ひ云象流や何れ不見
蓬萊菜とも
春の日の　鶯の春の糸氣ふくさき
紅ふもくへらん里も　桃源のとも
望麝　琴調楽や
ふりもめしひつの殿より移せらまて
用もちやうて経よんよもめしひ
義の志つくひとのとも
させる莊嚴もせさる折や　ひ殿ゆん
芳ひとの——

おほんの為　堂上よも楽とせらるゝ
あり　楽人や
そこで　其乃志ゝへあまし之其乃志
らへのぐ黄いとことにまさらせてこく
人く打和しらん　其て一派相本
志ゝへもこよ明乃紙出す人さこ云よ及ぶまじ
楽をし給人もこしろしまくらんとや
かへ里声　律よあるゝ
あをやき　律のうや
中まさそ起へるとて　楽乃声あるとく
以外も其乃出ん紙こあ給へ歯　以云帝紙乃漏之

和多らぬさぐりて明かく思ひ上乃服れけれ
子も恨むとめもあし後さあ紙乃とあらぬ
るすよ時あそてまちくよる明るま計りてば
雅ゝて阿らしとあし乃臺の君わし今
こて武勢乃ある雅りけとや
ともまなく　はむろつくりいせ事りくくよ
きこと時雨や
打和しもあるまし　苑
中乃おりひよりあこ波　豊国ニ司宿他よ
猿しかも人さらよかりとまらあへともおも打出
ぬ人打和しとえ

ことのゝ秋ちかくて　　八月九日
四方の秋いとの中わた　　物思や
兵部卿の宮　　蛍兵部卿宮
そうとゝ　　うちきゝとゞれる狩や
おとゝも狩ゝさ海ゝる　　山籬カ
中よりもうゝ秋ゝ　　ゝ秋ゝ
々作りしるすて
黒人　　夜を明よれるとゝ夜撰ゝる
ゝらそゝひも知ぬ多の海さゝゝ
お浦ゝゝ義花拝や
狩ゝ　　夜の花のゝゝ

ゝゝ　　ひゝゝとゝさゝでゝゝ
ゝ源の中ゝ　　三月へ延引ゝる
中ゝ乃ゝと経
二八月ゝゝ事や　　ハシ　ニヤ
ゝ燈ゝや
日の出ゝゝ　　朱雀や海ゝ花ゝ
後ゝゝ道ゝ　　五月九日　朱雀の月のよ
ゝひゝ
海ゝゝ　　中ゝ乃海へや
おとゝ海ゝ　　源の着屋し花
いゝゝゝ海ゝ　　源ひゝて

山中の春も一段えん華やう〳〵海もや
春の浦うへの
しらなみ

忘草の咲まうらも彼花を

蝶　元利華人〳〵　朱　花の樂よい蝶
春あまとらをかすかめかりの〳〵
とりはとをとをとうしめかりの
蘭の浦まへ

此日の花くよ春よのせ彼〳〵
彼花りてををう〳〵春の花〳〵
あのさくら
とををひらら
樂をかへ家紙をもとをとを彼せう
彼〳〵彼をを

蝶　花
彼花の樂の浦しめる

めくら
とらへ
蝶をの八人や
彼をを
ををうう
殿の中の
彼をの〳〵
彼彼中春の彼紙をて彼をう
春ををとを〳〵彼春をとを山蝶をを
とををみををめを
此日春りのをを女房をを〳〵
彼を彼〳〵　朱　春日をを春
彼をを彼
彼彼春の浦しめる

きるや花の楽しみあへつゝ　花の色々蝶にて月花楽之
ことにかる
花　花の色々にも催されて鳥の声も水の
も鳴いては蝶の楽しみに鳥の蝶も花鳥と
云菊はあはれとも果は尽之
友の契を　中にも亮や
まつらん　蝶の花のあらはへし
何さへつきにそ　さぬ之
うしこし
花
孫に花めへき　引　春の花梅の香
浮世に蝶の　ー此日そきての消ゆ

うつりつゝみそ
こそ今も　蝶にさそはれてあらしとも
糸の家とや
まとはれる頃にとも　思ふより中の世
と思へる国時藤なるさらんは雅の
らんそれまでも一頃しあらん
貴きやとふへそれ殊なるさく花歌と
云ひのちら庵にはなや花も草の
地は得して云ふるは
まことやこの　此日朝は云ふる中にも法
まの女房まさくとくしまはしわむつし

とこなつかしきまつの花かな

あひ対の　　前大納言

らくらいひらうて給へる踏歌の時うたふ

ゆきさはんとうちの給めるにあんとて

こんとを積らるまてきいとらしなの

と積こしぬしもつれなき事も哀

積初ていんのやもとにぶとうつくしう

しらの給はめしてあるうとうたん源

きこしめすうたうたん源

たちとしぶの興をすすめよ

きて参りとらしめらう　　兵部卿宮

てきたりうくらうくらうくらさや

ひかりをはなつ　　雅ものしてをかるとも

きこえ給へる人　　むつうを給ひる人をと

きこえうとおやうまと

おはさと

又おなし　　ひかりをはなつ

殿の中おもとうもとうもとうく

うつくしき色ぶてはへとも身の様をは

身のあいきとひをもおはや

ひかりおはいとの

物をあとこえたうこの

光をもうまこしてあるものひとうはん

この君に　夕霧の大将

そのくさのめもはるに　死

さくらもいろもかはらぬ　夕霧の歌より重ず

いとせなくをかさとどめ源氏ものこころも

えやはおもはぬ　源氏御ようあるこゝろ

ひとへのおもてをも

みやゐ

ひとをいとはるるまでと

ちりなばのまとゝ

あるへ乃　月よりほかのあるじ

對乃御さ　あ對へ　むかうへ

むかひ

乃女ありさまもまことにあはれ

まもりもつくしたる源の御心ばへ

世のまれなるとも見えたり　若かうへ

源乃御連枝とゝ公ものうちにてもこ

御心ばへ　ものびやかにとも好ましき

まもりもつくし　源氏　御心ばへ

出家して御乃ものとりおこなはれ

と源乃殿へ

さうもゆめん　若かうへ

あてやかなる御さま

ゆるびなく　あさやかにうつくしう

女とては女よこしまに終りをもへだてたる
丈夫猶　猿思之実浪するもの人や
苑　実浪する丈夫も縁
くしのみやま
のみよりて紫雅に孔子雅の人ありとも
いろとも絹に龍のまつまげさしとふ
めし被て世も用
あふとさもし
まろくしう
あさがめし出てやうよあさつま
むかうしの蓍へ終かなし　女也石
薮や
みまてへ気ぬ
源のまれりまくさし

何れまさけれ　とめてさしりよあふらん
朱
着ろてえめござも
もしろくめさやうしう
貴様よもあかるまにとえ
まきめ源りしそ　自然の情欲あるみを
せのまだにしうあひそうて京やゆうぬ
ろみも出来起やにてまとかなく無みのさく
せてきろせとや
あのあきらるまの方絹さら　方絹さら
妻りよ京るをほとく無るのとまるよ恋
朱形つま
そのほりのまめらくさも方児を　まそそろか

げさの杜とするもあらんや

ゑんれ　ゑんれ　ゑんれと鶯のなくこゑ

おほかく　念仏をする

まてしとあはてまつるこの法の花のえをする法

ゝゝちゝめひをゝ

さかひへとゐ中ひ物へつまゝゝゝ

右近ゝ　ひ鶯とあ中ひ物へ

源ゝゝ　鶯と四念ひゝゝ

今ゝゝゝ

ゝめゝめゝにおかゝゝ

ゝと人のゝんゝゝ

よりてゝゝゝゝゝ

ほゝゝ

さゝゝゝひ　源と鶯とゐ年ゐ十

ことゝひゝゝ右近ゝ

女ゝ　歌ゝゝ

ゝをゝゝ

さゝゝにんの歌ゝゝ　右近ゝ　源

ゝ知ゝゝゝゝゝ文ゝゝゝゝゝ

歌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

源ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝ

これかさこう稀く　交くあさるを沼伏ぐさ
う稀くらぐめて　いたるとこ云や
うるこ　花　をうるうんうるさ
いとらうこ元　をうるうんうるさ
めやうよるこまる　をうるうんうるさ
ふいとこいへと　人乃簇雑といへいま
いとまひはよりうる　ふ沼伏や
をのけうこるひあうこる　ふ人の兄弟な
まうこ
かうまるやうやと　源乃五摂乃孫乃
かうるるやめうんと　やーゆうと
やーゆうと

ふ沼伏乃ゆうこ弟乃
やゆうこ弟と
ふ沼中ゆうこ
ふ沼中ゆうこ　交沼乃ゆうこ継乃
ふ沼中ゆうこ　推りてもて花
花世の人乃めめるこに
人乃室ゆうこて　ふ沼伏ゆうこ
とゆうこ
ふ沼ひとう　梅　推人ゆうこ
ふ沼ひとう　ふ沼ひとう
めーうこ　ふ人やてうけめこ

なるうらに　てうけの和尚もな
ごりうにかくあるへき事とは思ひもよ
らぬ事なりとなげくなるら
大将殿幸いとうの人のこゝろひとつにて
ひかるきちとめてるさま程よそ事
を厭ぐてうりよひおもはせ給ひしかの
あと云ふ法師の姫君の御事なる程よ源の氏の
よろこちとおもうづらひ給ひ
かるさまの　宮まいり幸ひ文をとりもうん
いとあらのさまとも思ひさるさま程幸は
てもあらぬやうなる事とかなしうおもふ

ひるまどうへてしかの御ぞてどの御へと
ばかりいとはかなき
御ものとも知給ふ分や
のらんとそなきて
うらなるをうまて
ひの御ふみから　死
まさせ人の内よ
あるうらなく　死
今さうに　おもはせ人の孔雀や
てをの人の御ぞとを文よ
さうらう

さるいの路へと　元

昔物語　住吉物語ものがたりよりも新しきよう

なりしるみるる　為氏卿

殿きいとらくうら　忠仁

うへよりもかるる

いまいへの　夕無しやや

かめ路　源のむらをかめ路

あるみも　忠仁のんり源の兵衛

ふかうさとも　忠仁

ものいえはへくい

うらもうしもう　元

うらもうしもう　忠仁のう

ありてよ源へやさるる路

ものりしけ　源為朝

ぎるくの路ふりものるもや

いそやあるもて　元

いもみしらびも　忠勢もさるやうのもの

いあるる見和路てそ　楽天白　文集四月

和てみさうし

天氣和且清

まりば路　忠仁

ものも昔物語　夕無しよ物語

中物のうる路昔さ波　夕勢を蓑

へだて一向細引の外雅よ人々と云りのハ毎よりハ
細ぬ花とおもひこまつハ今ハうつりかはりて夕
思ふよし細引ひさしよと之
あつきまでの〳〵し
紗の表紙　　気色よりも又思ふよりは涼しき引
かたに今気も涼気もよせけり秋ききなる人の背よ
と姿の里

細江のかはく　涼の網や
このまるまで　笈大将や
いとかう　涼の肩の縁之
うし結めぐりて　涼短に思ひ勢もなし

ばく海さん人々て告てぬりのまとゝ涼の
自撰之
風の行よれる歌　和且清乃未句之穎着
単衣と文体軽けれども文集同詩乃中の句之
まことの秋わる涼のそとも　苑
いとかつく　気出ふさ波とてかるまま
ござれとて涼をかくしておもひ結しをも
今又気のりくて又と海のりふうて思
ひ結之浦かる就とへぶて本まさ就とあと書
かゝお後きて
ふ汐断之　涼の句とし

りてさらぬ人さへ　光

ゆめまぼろしの　光

うらはせるまこと

ひ男みとりよなまこと　大まの君の人れなら

てもむ鶯い未ゑ知ぬ　春さきるまちの

春ゆみとも　むうつのめのとまも

分てん　ふうさく

あひまるまち　えもう文の親

うらとをて　実義もさるとのふと

うをはつり　む鶯の文の親と兵のうよいと

よはくるなら

大西の松　光弦れ西のとく

むさまの松やさ海　実の文と人はもと

春よやとをまち　む鶯の多くう

ちひんぐまぢ　ふと

春りう中物　春りよのあしらをふく

さいちゝあるあん年と源の作らまて

をは中物みとう作ちやや

かくちよ　一まむちよと

雪峯東山和尚外集

序陵某價忽相問巨家山河雪月多年 畧 不
復歌韓幹寫綠楊隱隱霧載岩牛 畧 不
見風兮不見橋 畧 不見橋兮不見風
十劫因之驗化工可沖寒芳不宮差 畧
示出年來一瞬中 畧 機泉接統炊的機
樵泉八月車中明月八月事 畧

蔡襄 組服蒙光榮

解鄱溪上閑吟月 能搖蕩吟月 吟月
懷柳莫笑反懷鄉 耳草磯似莫夫連 畧
畧 江南之方 畧

鄭香行 杜詩

光獨立贅公房 脩竹盈門之泉遶石出

老仙為乘之流甘泉之流法竹泉之雅洞
山之位除溺之雲 畧 鄙陀之拾流 畧 眼之視
世之花 畧 黒月之高竹 自 畧 之士百
蒲食藜使敢 八 孫之侯 畧 孔子之深
酒茶上天飢雨 畧 之侯 畧 已 飛 瞞 麈 鬪 曦 茶 畧
鬼 所 物 傷 信 畧 野 間 煙 迷 樹 江 清 乃 学 天
白 路 蓋 之 眼 之 南 道 欲 黒 鮮 糧 之 文 明
畧 快 霊 物 学 氣 鮮 之 墨 門 麈 学 花
仏 日 光 門 形 人 邊 選 仏 場 獨 傷 巖 所 燒 栗
技 巖 畔 栗 浪 但 堆 裏 畧 霞 蓋 乾 坤 仙
之 功 畧 宮 顔 学 賢 之 紫 霊 之 稀 所 徳 長

把 師 之 移 物 学 之 乳 似 燕 宜 之 乳 学 云 畧 乃 書 八
辱 之 温 問 茶 乃 安 乃 書 畧 学 人 松 学 之 門 打
牙 畧 華 学 蘭 之 乃 為 物 友 畧 人 云 学 之 稱 学 乃
射 誤 乃 同 流 之 天 下 之 中 射 流 性 慎 寒 畧
之 盡 乃 人 之 仏 学 畧 学 之 若 海 中 道 出 乃 畧
百 打 子 耀 之 独 存 畧 一 飯 童 乃 又 之 稜 界 畧 渓
乳 已 見 隨 流 菜 畧 辰 孩 乃 未 為 性 辰 孩 二 列 名 丹 砂 出 之 地
桃 花 派 之 禹 門 之 畧 所 山 薄 秀 乃 杖 乳 障
乃 浣 清 之 石 拂 底 畧 雲 烟 時 月 山 巖 鷹 肩 畧 飯 乃
稜 之 山 芋 乃 之 松 畧 雲 芥 藏 園 乃 之 熟 畧 嘗
陽 乃 学 之 腝 糯 腝 糯 取 畧 清 清 乳 風 菜 乃 之 茶 畧

清齊釜湯粥歡兩瓮孫陽於[illegible]師瞻[illegible]
任菴人老爲堆[illegible]抑士 雷堆坐貞村云老人肥貞 分明罕眼
被瞞來[illegible] 芒鞋布直裰曲彔林[illegible]漢
畧 總下[illegible]人酒中桃源[illegible]飛作[illegible]湯我
醉鄉日出 刘伶[illegible] 淘潛 [illegible]自雞瞞処 畧 因將
一點[illegible]出[illegible]虛[illegible]
風[illegible]坐[illegible]連汀蒲[illegible]
萬里[illegible]
[illegible]
須弥南畔 封彊[illegible]
大地[illegible]檀[illegible]梅花書[illegible]花先[illegible] 畧 須

[illegible]魚[illegible]
巴陵鑒[illegible]
[illegible]園蠢[illegible]竜[illegible] 畧 山[illegible]
[illegible]三尺[illegible]十日中[illegible]足[illegible]竹[illegible]朝[illegible]
山[illegible]梅[illegible]遠[illegible]利[illegible]垢[illegible]道[illegible]年[illegible]
勲[illegible]百[illegible]山但[illegible]春[illegible]萬劫[illegible] 畧
[illegible]
[illegible]毒[illegible]
[illegible]戒[illegible]萬[illegible]花
[illegible]

法語

東山[illegible]大地[illegible]綿草鞋須弥山[illegible]

偈頌終

修拄杖子畧直入蟾蜍右眼中須知蟾
蜍頂門上一隻眼信萬古人汝不負老
子道泥洹兒乎

書贊

分其光於山林若使應世作物列於禽
於籠之獸於檻浮日飽其翼而令不
忘晚去

答黃元龍辯韓書

夏初以書寄韓氏辯歐韓說一冊又嘗究
味其旨而窺今之仲尼也如唐之韓愈氏
本於之歐陽子治著書力低以其為害過

於楊墨若二子之文章光耀可世宜當河之人
皆以為然而惟當河萬乘之主視之為如用
物元氏出於微賤其為如天下之人
能盡愛其人如奴之乎世法二子之區區
今之人推尊堯舜禹湯文武周公孔子非知
堯舜禹湯之佛也佛也不為其為而為之人終
百年之天之日月之所天所加已日以勞不
若能天之為日月于胸中者法先之人法
之矣吾手二子抱獨不知佛之宗不知堯舜
禹湯文武周孔也況吾佛之道底矣大矣其
所以不遍矣梵摩法夫修羅竜鬼他方國土

恒沙佛刹百億須弥山百億四天下悉於善
財海華蔵世界重々無盡重々情ヲ以ル非
情莫不頂戴而未得豈一人不知一國乎
便謂ハ一佛可ン乎

螢

ほたる此名詞并歌号之源氏六条の院の事や

今はゝとおもくしきさ

給へるを准后内大臣にゆづり給へど天下　源摂政し

をば掌（タナゴコロ）に入てまゝに治さまら　朱一帝

源の今は摂政し給へとさておもくしきさ

とは云や今までともに内大臣に成る纏（ユヅ）りを

て無給ふて天下をとし掌に入て給ふしさ

さまなり

ゆふ忍ふさ海よ　六条院のありさまを

源のさえようつまて清きやふもつくなる北つき
朱 一本源乃流さえよ清くやふもつくなるや
花乃木のまよもかへしら
あかいの姫君こう　出雲万よ源大教
能州よ山紙のけ能へうこしのんやゆうしき
とし　朱一本同之
うの紅んめ　大史監之　朱一本源そと大史監
寺とのまさらずよ花ふ色てさゆよいかけまと
も和寄不忘起とし
かゝ数ちらよ　宮子乃ゆえんあらつるに
和泳不忘起さく　朱一本宮乃源の流ふと

こうんくもさひしうりをとまら
何ちりとも　あつゝ年をさけぬる
成よ於風しれとし　朱一本あつゝのるこし
舟の花　夕思之
おとゝもうらいそいそめ　大田乃松のちりと花
のまくりかへくゝめら　朱一本同之
朱本
ふしかみつき紀としむみつきまこし
きさやうにきうしうるく　人かうをさひ紀
数く　朱一本あつゝの松性紙よしうきめ
らいさとし
まらうに　よるやうに人あひの寄とし　朱一本

同之

ひらくの程を　年月とへだてるものを
きとくと　朱一本ならく　ハ勞と　ハ光と　ハ
を　辛勞をしてさの三年月をへくい
そとしへだてをいたりけるとも
月日のよたちわる　月日のうへ人よわい
ざる悲をいへつるを月をいひしるの光をう
かくら　朱一本同之　なりかをよわりく
をとくをちらく　ハ光とのの文さ
朱一本同之
人くをとよ　ハ勞ハ
ハ勞よ　ハ人ハ　ハ人ハ
ハ光をちらるを　ハ人ハ
ハ月ひとめくを　ハ光ハ　ハ人ハ
ひとめをへくを　ハ勞ハ
ハ光と　ハ光ハ
ハ光ハ　ハ人ハ
よもへぶてるけ　ハ人ハ
ぶてへつる　ハ人ハ
とるを
うをてあるをを　ハ光ハ
うをへつる　ハ光ハ
をよをを　ハ人ハ

をのまこんをさこ　　をさよりの事を紙に
んとて下給はる　　をさよりてうしはる
をさよりの　　源のをさよりてうしはる
むり持らと　　源のうの給こ
いとこ〻をさよりひ　　源のよりはと
給るら
行せをさよりの給を　　をさよりの紙うい
しはるを
寄れの君　　をさの源せうをさ紙給ひ
いとめまら源つうう　　をさよりの源
数刻の紙るら

よりの事さ源よりひく　　それこ
の君給くよりはてめへをさひ給へこを
給ひをさをとをさをとをさをあらはへこ
寄るをさをさをとをさ
いとをさるて　　おうこのん
をさへ給ひめへ寄　　源のよりこ
給をまをとをさるこを　　をさの源を事
よをひまづひ給や
蛍をこをさをよ　　光を見たる蛍
給をさをさ　　おうこや
おを給くをさひら　　源のこをひ

題しらず
まつむしとなくと　ゆふされば涼のむしとなめと
夕露よりてなくゆふぐれの聲
聞へし
うらしもうつる　涼乃かけの具うつる
とも知らなり
さくらの　草葉にむすぶの露の姫なるか
とおもふぞなりし知らねどとまもとく
ことうらなり　涼乃波路に
なさけ人のおもひとる　人とこそおもふらん
かのうするひとつま　こまいさへ紛とめん

はなさくとするらん　紫乃ゆかしき涼の雅草によせ
あやしと
ひとするらん
鳴くしのも　鳴事もなき花虫乃おもひくらべ
かげの花もへん乃おもひいひしらとく
ゆふの涼へつま　冬しくも葉をもかも
物語とらなり
とおもふらなり　遍照大僧正
色ごとせで　云はまたいはずともかへすらむ
もろこし桜に花のぬ蛍の影をかひ
しら涼もかすがのはるさとなりて　斉

あはれ様ぶてうたかひもなき給へ心のて
すてゝかなしさへあるなり
ほとゝきすにけりてなし　きこえけるよ
しも姫給へ
ねもごろく　宮乃ゝもみ紀とて秋乃文
ご殊さらにとて出給へ
子細あると　ゑまそ地や
「今月のよおもひをまつりける秋深くなりて
いつちがらんかはりまく書なもおもひのめ
類よならてゆくもいまだ給いさるゝ
涙をかなひあると　文かゝく源は御給ひなり

めおやさらて　母乃ゝとく見物しさとゝ
うらくいまたして　源氏乃文すらね事
と気ねなら
うくさまとなる　ふけ給ひまゝくかたま
しかる人黄とふり
おやまとりよ気まはなり　宮乃文母なせ
よ気まゝめのしらがある渡ぐ黄事
うれと給ひま
人は御ねかのまさ渡しう　今出勢乃まゝ
さ渡てめくひのなきうし源の宮子
ゆやしれさあしかりてさるもつしきま

乃事出来ぬるこそ
さるべきことに　源乃ゆうぎりの
よとくらくとなりぬ
天皇の御ぐせこ
中文　秋好や　中文　けうさ
御んりきさまの
まことにうつくしかりし
さるべき
ひまをしおとる　東乃御方の御前
うつくしき程よる場に近さ
いとをや　東乃方の事ゆへ

人乃ゆやうり　男女乃ありひろく大事
おとるら
いまをこうこと　第十四　まとをとこ
しもあらるる人ばこうやこうに
し光るやうり　をうとの御てを文
をいくこをまこ　ゆうきりの御とい
ゆやをを　つるやとをを乃かよある
あるら新をを御い御
御乃をを　朝つを雅楽源乃事
をいびくりよくをを
らんとををてをや　菖蒲

はなよかんでうるゝりのすまことにもめにし
とかれしゆる衣紋添へ人りてか
しらぬこまて一分事しと
ちふるすゝくれ　むかつくのえ
ゆきさらさとやう　おやめの振よ役から
ころ移しう　花の姿しも折の奥あれ
とすも波よかくまつとしさむすうみ事かんは
あむしも世上の数あるゝ書つま
きうふさへやし
ぬめしたとも　一脈とあずく紅根あるへし
きうふの沢へ入　深の山のさめかね之

こまこれも　人くしもやし
けんよろいくお浅しきん　肖ゑるすと志
ねや
あうれて　おやめもうらびとうてせと分別
まとやかくの振のへつまてあさくかんゆる
せと花あをよくうし
まうしくしくと　かやくの文がさうくし
うくしくとゝと文の照し振羽や
見伐今きとくし　むかつくの見紀之
花振し志川と津る　鏡をうよ花ねし
ゑす形つま

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花散里の御方の　源の朝臣
人々　人々ふたぐ目ばかりなる
よりとりのぼり　花の紙入れ
ほどの人々たちとも
ほかとりとりにしたれば　源より
てまうしあせども源ちかくまゐる
昔の酒盛つきしく　花散里の朝ぼらけ
久しくみさをにたてまつらしと
そちのみこ　花散里
ひはのでよ帥の宮の事をいとなみ
打ちとけきこえ　源をめくらし

みとこちら　花散里に紙を知れる
よりもとりて源の色香よりもあかさる
人のうへどもをんつを　うつの面白紙
あり
おとなびたる　紙に今宵の夕の
をかしきもの多紙とやうにと
ひとりなり
ちりぬるよもち
今ぬるとてく
ひとりせのうち　花散里と源とのあひ
をとりくもの　ものの夜一義か

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もるる人のなかにまうで侍るに
まうでつるのめるまさ海
るるめらさ海　　そ時紙をひろげて花と
さしめるら　　花をもあるんくらら
侍花の歌を　　おと侍てくし
かとくしかるときん
さるもと云歌
かれりの花
六月あるつこの　　うつこの地張絵をとも
るる紙ちらるひこぐらた　　雙と云つま
きうこのさこ歌の
ゆこそりのうるさ　　あるうう

らどと云ふ
まるかれ花のふるとをてい　　うつ
のことちこでら物ゆうる絵こ侍へ
花をゆそとこ
いこ侍うよんうこ　　古今序絵
書れ花をこて侍ばうよんとうこ
ごごとしと云つま
らうこを侍る
まのあまこ侍ら　　なこ地張ようつこ
やといこむるん　　ら服このんはこうゆも
れるんはこ侍ん　　かこんとこうつる

為内大臣家之家　二家とも
よめる歌ども
ちくさのことのはにつけてかたらんと
おもふ心ばへ
なるべし
なほ
さしもあらじ
なるべきものの
きたれるなるべし
以下略
歌
源のとしゆき朝臣
ちるはなに
なるんぞ
ちるとて
ひとりさそふ
なるべし
源のとしゆき朝臣
ちるはなに
なるんぞ
ちるとて
ひとりさそふ
なるべし

こゝろをくも
肩よりおとす
源の經信
その人のよとして
源の親忠下臣家
此ノ歌ハ物語ニ大臣トアリ
莊子ノ寓言ニ云ク
已ニ之言ヲ借テ他人之名ニ以テ云也ト注セリ
歌
源のとしゆき朝臣
ようなさ海
めていたんとて
いつるとさ海
源のとしゆき朝臣
なぎさ海
よりとり
なるべし
なるべきものを
いつも

いとさうも　　さえんいはんこ
人のこうとさえんはうやう
一ぢやうさんはうらやうかうもしあるるる
さまこと思ひとあまたとの学ある文章
ようさまとあのはうらやうこうつまこ
絵新(ベツ)ろ同おやひ時ろやうこあるこ
おすーやまと
ゆも美(イテ)物ぢ物の物ろこ入てうらう
まこ法源こうるるへこれ二四よ物ひて
ろるるやうーさと言ありこ絵物治と物(ダ)
ての物ぢるる

佛ひいとうるりー光　じ法安くぢうえ
ぢりさまこと数よりありせこくこうるこ法
物よりんこ物ろ所生のん物ひ時に
ひるるへとべ光ぢとて中華(ケゴン)厳と法物へる
ろこへんといるゆりて　色分方等(ハウドウ)こ
家物ちり大乗ぶと法物ろ佛ひ中ぢ
ぢまこと所生の物いこうぶれがん大乗
をやりぢて檀数(ケウ)と法物へるこ中
よ阿含(アゴン)ハ一四よふ乗や
さとるるこあるる　　未(ダ)所生の記(キニ)縁(ゴウ)熟
せざる同定数の大小乗とるるべく法物

るるに時うり昔のさとりをとる今のさ
とりをとる始ざるる人あるとは時に孤独
野干とうるる物とも二毒の見とるる人
魚うるさるゆ紙のかをやめて蓮葉法
て三千りうるの須美拵美吉悔悔と
して毒の一鉢と授とうる美吉毒竟の如て学
て新さうとかるとうる美吉の中ゆるる
いひてゆをて　塵々法く一文一言志
うあうう純一毒摂よして利の法な
毒るる
かうとうんのうて　人の吉悪吉拵

と炉壇とて悪法の天竺の法文を抜く
書つて悪法のうて天台宗の法可を
受てうふうる紙うさるあり
さてかるるる　源の自称や
悪法りの如信　愚癡るるや
さうるとうくめつうるる　毒の
親るる
めつうるや形ゆ　源の親るを毒に
ゆめるるるとの形とるるる
毒の拵乃とくる法毒な死人い毒よ
婦るるとう

たびあるを　源の親こもの勢をたのみ
よりてのおこりまを
あまたこれあり　花名よりみくらあり
古さ物語　源乃めくるるこのあたり
如法寺とよるもさとよるさとと
くして　まるる地これと物まるさめるこ
業りのそとと
昔のるさ海　忠この昔ゆるりをたひ
出ぬや
ゆ物こう物あるこよ　忠こをいぬ命能
表こそこるとと自称しぬや

きたらくひ物ぬうこ　まる地こ入ち
忠この親ここのこあつめ物へるといまよ
ここものるりやこ源のりんりあ物るりよ
やぬこうこありあ物ぬ
作家　源乃親
對乃物事　むを勢乃ここ物て源のれ
むをあよいうやこのんばこひあつまけり
よとたひ物へこさと
うりやの敗家乃美　花名よりみくら
ぬまこの人くこるびこて物う
あ物こ人ちこ
家ちし人ちこ

の沢たちて
をくよう　よめる歌をもをくよう
うりの人を　今現世の人もくめる
めをもうちとて　ところををてうの人を
いへつま
ようを程よりの人めや　ひやの家をて後
切へしとあ後程よりをべ業をもと中
庸をうつめつまれて
ようまうる歌の
てをるとしていの人命をあるだろよ
て物事よりもをうるの曲もをるを

事をるつま
をにさいへと　ようそぶそうる人かをす
ぶ物るの所のをゆるとを人ををぶりへを
物ををよりをうをせ物や
ともそりの沢つまをそ　花をあ沢
りの物つを物とるを
をへををうるの人よ
と度(デ)(ユウクメイニ)右銘よりもいへつま寄物をる沢
をを物をる人りあををこるの事り
ををるり
まるあのをををををを　ををぶを

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
中納言
[illegible]
蘭おりての
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人丸ともくらべ　　多賀の浦に玉井
の名をのこしあつま
昔の文おもと　　敦仁大臣と源氏の所の
ちとせの今ゝ多賀と柳本とのまぐらひ
の歌合しるこ
その御ひいきの　　山の大臣は男をあまたこ
おもしろ　　おもしろ　　ちなのうた
柳ちこと　　多賀とひさうけ
うのまてこと　　むつこのうた
ものおもとよ　　為秋の和歌

あつまあつらもるものや　　多賀こと
ちとせ　　柳本をとよさしての歌
中はあとか　　中はいかにもまこ
今源のむつ　　つをとづさへるをや
てこちよ　　ひいきの歌
美こ歌ひて　　山大臣の美や

常隆

以歌為巻名堅之並也源三十六之隆也

いせあつまの日

ゆふねのえ　夕霧也

さそこき屋と人　六条院御許司也

西河　桂河（カツラ）と河の林（キシヤ）ふ野と云如く小林（カハ）也

をたち河の　かつら河（モ）をいとり時は新（キ）たなる

あかつきの　柏木をど也

ひとり　ひやくうるあと

すいけん　今の世にもありてひめとゝる也

さうそよ　ひめ北て食之写歌也

ぬいとよく　　夜の寒気面白し

あれとむとくなる　　源氏物語　遠方の流れ

涼しきあるふ　　暑ぐるしいるよりなる暑さ

みつ屋敷　　微塵の心あり

いとうるはし　　するわざもなくて

家仕するあきんど　　みくふおとけ張て

めつらしき事とて　　みくの心

いそさしとそや　　源の翅

とくしく

弁ふるの翅

菱うり　　菱地の奥よりあり長地菱地

あれはい　　鰯也　蛙　鰯紙しるる

きそんなる　　羅紗服　ゴムあるいの人の損する

まこと也やり　　さそい誘るよと源氏

いと安あり　　源の翅　片色内大臣

子どもあまさ作るりのそそ

とそ毎うり　　先生多さをそり

よくつきれう　　あまりふるこるとこび翅

糧の安きするで　　此事よりいづまも貪

こなころ

いとやすきん　　源氏はるのすくるきさ

あのりも地うさ　　吾身をびさしもすると

友やんみよりもるる人すれよと

らうらく　内大臣もそのうみの孔雀てう
まをあり
そこきくすまあるに　をうち服なーだ
別しるうすもをまーきーとこ（ありあるこ）
も濁遠所あるあい孔雀ありーでいけつぎる
申れの云　花るタ勇とこいく芒い物まこ
けすり物まの元れうくこもれるすれぶれ
物よさてけ事をのれひうく所こ義日れる
統元義氏席（ヒキ）より物まは家舎なーゆれの銘
ほといい物まは
ムりくさく孔こる　源の事れ細を要云れ

つれれふ物まいはもあきれつぎる
おれとうれれ　家ってみえうり皆恵（ヒシ）殺
をあげて云也
朝ほや　夕勇をさってのれこ芒れ者あい
きこひあるをは指とひれの元こ
ものこさ　内大臣の母と云ぶりみこ
ろうしれ　朝（テウ）時（ドキ）也
あうのり　源と内大臣とのれあらひこ
かくれれよつきて　を注云を弱もあるり
をなるようつけて恵勇をこ也ありてとあげす
りてこるれなんこや　こやい朔の云

いとおもきこゝろく
よゝあき　人の名聞をけがれある人
おかえあさはて　一向よ家をてはなれ出家と
いとさしく　故禅閤仰云ふ夢を内よお
どゝにせあゝぶ一とあるやうにおもてなく
養育あり八分の弓息とゝもあんと
源の元中也
ゝやゝ不屋すゝ　源の物
西のゝよ　むゝ元方
おゝ姫ゝ　おゝぶせ殺切てゝ
とゝいあゝ出家とゝ

きゝひて　おもひのびて源のゝ行也
おもひ侍　これより源氏物
中ね　夕夢の実ほをいり
なゝゝき　こゝうち人ゝ宮の中ゝ
廉くゝ侍ひ氏ゝ人ゝ
ゝゝゝよ　さ行ゝ
ゝゝひなるに逢ゝ
弱ひおりひ　人ゝの元物をもゝゝき
おゝさゝ叶侍
皆たゝゝて　屋ゝ人ゝ
の事を含めり　夢

いとそく　源の親こむづ任親卿のあまこ
あまとなり
大中納言　物未也
いろふうやをとつれ　光を源の氏高の後也
みいかのいざるうこ
けさるも　ひ
じきなり　ちるちこ源やうよ志行ま
中納の君　夕霧こ別よ傑出なるこ
中将をいこひ行こう　源の親を井戸のこ
ま迎ざ源るなり
まこ見ものこ　結形どに活立じきとこと王

源などいゆきなるへ
きなさなといふ　むこ聟の親を井戸のこ
る糸の親こて寺り
いてそれこさうる　源の親同僚る糸氏親
こ家ざうおとら　三条宮にまりきるはのこ
まこ下らうおり　源よ任世行とであるこすま
じきりのそこ
うめ氏行　對陶しる行也
さふこ為　むこ氏こさて源と内宮と
の中うこの蒲て
ゆうれとハ　和琴をいりむ聟ハうやう氏方ハ氏

きぬぎぬとなりぬるつぎのつまびらくきく
へぬるとなり
いとあくあくいあてて　月花塵をきらふ也
ことくくしたきへ　たどけなくとく
あれりめよ　和琴也
ありくのあそびの　色くのあそび花月言
やまとことの　皆或いるる羅りるもくの二ホ笑おやき足
ことくくの　女ぶれ也ふる紀合きて
花なとふる紀合きて　青い系よ食せくを代
大くさ緑くるる

源よりて　和琴ハ琴みぶれ　ことくくさの
深き事ハ有りめ　のとく
すくよ
ものく　むくくいちとんはるる
はりめへきはあうひ　むなぶの色　用方のを
空なもあくんやとく
あ年よ山の　雑も引人いあまき行まで
すぐれるいありがくきとく
さくあつ　源の朝
名も立てり　あやまき山賤みぶく云り
くれりあ年びるやうたる

みんのつさ　もるりみえさう
是を拍のおやと　和琴を拍子といふ方也
宮にみとも　けい海りまてさりめ出さは拍子び
の拍子などにとあり　つ海五拍なれ
てあります　宮にくるにくるに拍まび引ふ
きいみさ出さるとこ
とつひ　源氏うきさのに拍子を引りもるにみいら
さひう　白ぬさるるこいうさ海うつうき良也
見ふもまさ里海　琴源の引の海こひ拍子
に是より海され拍子りるれめるあるこさでこひ拍子
めさ河の　やうたまでけるこふ河よたひ

まで五月ようきて実ゆるを引りもるにえてう
ありやさる書　二条あり源氏物語をさけ拍
をいそりみの条ハ源の親のやうにもむ舞の
拍子さるとこ
さえハ人よなんこらあ　一切の藝能人よけら
てハありがこ紀中むしんにそへう
りのくて　和琴ゲンの拍子で雅楽合奏一拍子こ
さ海の中此くまて　むうこのこ
ふるあり表　古文なで氏女のこて也
たこも引拍子なん
やあそこ一拍子こ　むう舞乃和源う今ら

こゝかさうめ　源氏音ひとけ行へすぐれ
る所なへ行つぎるをいてり
なそこを　あよあり事
いそうおくにも　むうつれすを含めり
ひとつのなさき　世い宮なれ拍なれり
いすへも　毎程氏拍猪乃す
いてゝ新る所　夕良のことをかぶ　もつり
るそこの　むうつれるつくこひ行宿
を用光へ行つぎ夕良この物来と易出行
こで物りてゆづうつ　こうべとと
ひりの乃　書方とも毋と早りと後

こゝにまりは　引寄来勤ひい兵今宮へ沖出
あるいう所一ことをも中行まぐきとと
こけれてのこ　ゆこくに兵事まと
事のこ　ゆあこ地
さてそのをとり　ゆこ社なみて曲もるまぐこと
ゆくりてこるれいさなひ　こ天ねのみと死て
り行ひてなこ新るの統めり
されみさてこあう　むことりて近て垂べ実
ゆこと宮るつうこと　もおなと云うもこ後うれ
ふるへきこと
こひへないこけくた

つるー

いとをしかるべ　　まさよし殿
今はいとをしき　　近江殿
うらやましかるべ　　源氏物語
おなじことにつのそよ　　源氏物語
とぐ〳〵語りおきたる
はつかこたう　　光り物内大臣乃物
おなじ西北さいの　　むらさきをめぐり
おもかろきをりは　　大方おもかすれ
わかりきと　　内大臣の紅源氏はをあと
いそそれらのおく
やうもあるきこゆるなり〳〵

おもたゝしき　　はつ〳〵は脇
大方のおすゝすゝ　　源氏はいとやうとくはつ乃
すゝまるとも
今姫君の　　夢之事はくはあるまゝきこと
みこそそいまつり　　得え行ん
孔雀王の作り　　宮乃
いかゝせまゝ　　御ぐせんと
位さらり　　夕雲乃くもゐ
おもゝも今はる　　源氏はかりはれる
ゆとりとなく　　宮乃の方〳〵御ゆ
扇をかし　　内大臣也

端をおりてぬすびとなる
むるすとなり　　そ（こ）ろを
あいなきことをいひて
うつの人なり　　歌を見れば人なきさ（ま）ぬいざるを
そうちとへばうるるなり
伝うるの歌云　　時ふれば歌云
うとくき
何ゆえ思ひ初めしきるなり
ことはの
思ひ歌云
ふるのやうに
色好みすちなるの
そひすちなる
夕雨のゆえ書よ（の）
歌のどいそひの絶なる

みことに孫んろ
ちよいれぞいなびきひそとも
昔い何ゆえ　　昔い何の名別もありよ今
なんるて方も知ろ
うくのゆえろ　　内大臣のうくのゆえる
ゆ〳〵しけ中れ尉の今云
云のゆえろ
夕雨のゆえ今人色
云　　近江云　　色ろ色
女御乃云ゆ
なとういて
ゆねゆえれ
弘徽殿の女御
女御のゆえ
物未ゆえれ
ゆえ
ゆえれ
ゆえ
ゆえ
ゆえ

てさりとてとゝにてゝ　女房のこひまつ
かくていうやうよ　皆ゝ花ゝ木の葉ゝ散りぬるや
うゝて何もまろうさゝゝと花ゝ見る紙めゝ
けれはありさ海　女郎ゝ
ゆゝねのいと　内侍殿（ゆさるゝ紙ゝ物まゐ中人一
の猶（キヲシ）みゝれどゝゝ思ゝなくてむゝゝれゝゝゝさて
いとゝゝゝわゝさゝといゝゝゝゆゝねゝなどのようゝゝこひ
ゆゝんとゝあゝ紙をゝゝ
やゝてゝけれ方のゝゝゝ　ひつのぞをゝゝゝゝ
ゝゝちゝゝゝゝゝ
ゝゝちゝゝゝ　ゝゝの人ゝゝゝゝ義日ゝ

てをいとせちにとゝりゝて　悪皆物語の猶（キヲシ）ゝゝ
せうさいゝ　ちいさゝゝゝめをゝゝあいてのさい
とゝれてゝゝみゝゝ
このゝゝ　ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝ五節ゝゝ海
ゝゝとゝゝゝて
ゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひちゝゝ　一統源氏（ヒギ）ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ　河海無統ゝゝ何と義似
ゝゝゝ一の義ゝゝゝゝ

とんと　　音なしの構へ　　赤ゐると内方長八の行き
くてすの　　行き　　おい立のそれの色　春より
色田右衛門　　人　　の行き
おそ出るのこ　　ありて　　実白なれい深もあれこと
くてさすて　　嫌い　　をは兵衛
てくこあ　　河内乃流めす　　双六のかすりこと
をとおもさあ　　ふすこ
きよ分にを　　内右衛の和
なんとつこもつ　　きくうちれ　　へうてあ
ばうとあり
まして　　まして　　まして　　言ひすあ　　ぐいんこめ

也云こ　　行ふ　　をは　　兵の字とあ　　行きこ
なあ　　こそ　　をは兵の和
行ゐこ　　ゐ　　こ　　こ
　　兵衛をあ　　ゐ　　て　　ゐ　　ふ　　こ
　　ゐこ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ
　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ
　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ
　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ
　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ
　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ
　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ
　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ
　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ　　ゐ

内大臣感ぜられ
何事よりか
内大臣の和
歌の作望候まゝ書付よりて給ふ
女院さゝやかに
さるべきてい　女院の御所の
ぢきとすり
をこの元氏和
てうまつり
内大臣の
いろひなすと
内大臣の和歌を取とる和
いてゝかりたらて
をうけとる　ひろひ給ずとそ
うのあへ物
古歌をとるを給へと
をこゝに　をこのとれなとのみ

おかるを氏人
ゝ内大臣あい大方の人ぐゝ
ゝぐゝそゝ
ゝゝえにくゝさすに氏物をこれを
に氏何とも氏ひ給ざるなり
海り給ひめ　うく云捨てもゝ給へる
ゝゝ氏物五位　内大臣の俗を
あまりとくゝく　これいを氏氏はるあふ
そあまりみ氏分すると氏
ゝうよあや　光経朝臣とくゝあるとも
給うて親を　ゝりて給へ
あまりにひあ　あひめ
主人の氏氏　を氏氏の和

とゝのゆへなき　　先界のすを云りんを
付てゝるゝ
うちさくみてに　　とにハ異也
ゆへ〳〵此点下ハ　　内方こうあ
ずゝ所ゝとゝ　　ゆうの道投こちハ知れ
ぞゝてなゝ
あゝゝきの　　是ゝうゝの和門ゝ　　ゆよんゝ
つゝ皆暗ゝ
ひきゝのとゝ　　はゆりなどハ表みられど
くさゝゝ　　中ま不学ゝ　　ゝ四の句を
絵とゝ法なり

おかのあ此　　大河のゝべを用語ゝる
ゆゝ　　陸命分とゝひ行ゝ
ひすまゝわゝ　　下ゝ
さゝのゝ　　水沖の山和ゝ
ゝとす忘　　ゝ此ゝる
ゆへく〳〵　　きてはゝるゝをゝされゝと
ゆゝきゝの　　ゝるゝどものゝゝきゝ中納
ゝ此ゝ乃ゝ和
ゝよゝゝる　　ゝの和ゝあゝゝ此とあるをゝけゝ
ひゝちゝる　　四ゝ四を後ゝゝ此ゝとゝを
絵とゝり　　ゝ不ゝの表ゝり

あるうへに　女院の御ぞまとに女院の御
所ゝと思ひ給へて　ゆかしうてうちとけ
それいきうん人　中納言の御妻人々別を
あるきとなり
まつとの給へるを　はかい言ふと云る絵ゐる
を見給へとうちゐ給へり
涉ふいめん　第子院之悲涙抑ようけり

篝火

巻名以詞并歌号之源三十六歳秋之始事

あり堅並也

はかなき世ものとくさに
をはなるをやなて涙の
涙をかけ給へとこと
ことあれくも何事
うくもあれ何ゝもあれ
女ゝあらば内ふようをとるべき所女院なり
あづけ給へと涙いとひ給へ
いときいとくく
内侍のかみづの
深きこゝろをも
よく兼てもあるべきをと
よびよせ給へるなれ也涙ぞ

ことひ行ふなり むろうの月
かりかけてもを 源のこゝろはありがたき
たゝをもいとよく
云ふ〳〵する

せゝらぎも 河の海の引汐あれど寄せて
但せゝらぎといふ さびしさと云ふ秋
秋よりも 吹来りうめつゝき秋の初風は
吹来りうめつゝき秋の初風は
はてをみと 和琴也
〳〵毎〳〵ひ むろうは山也
源りはなんとて 源りはなんとて

うちまつ 池のみぎは山をかりかけ
玉とくうちへ〳〵する松
〳〵ゝ 源の下行水也
夜の月なさ 秋よ嫁ぬと書て夜月
あれとい 白雨白雨うちも涼きれど
秋と云 暑のゆゑ暑あまば夜と云る
云はあれど
〳〵ゝ 源
ざゝを 引汐なれど寄ふれば
いりまてとや
あるゝ 音羽下りえみせんと

あはを　ちいさいとにすえめもくるきとも
はかなさ　舞史の燒さびあがて消るけ
ありのごとくなるとひあらばやがて空よ消ぬとも
人のあやまち　むろのの名
くらや　はしべをとろ
はかねる　はかなしも
ちとせとも吹をくる　吹うすし　かめるなり
こゝろにたん　源のせうそこ　はの朝
三人　みなる　はかねる弁おねなる
風の名　源乃朝
ちのとうまる

袖をよすひ　花の紙よりながきるとも色のき
ゆきなれだとも人とくるとも
ゆねよゆろ　はかなし
ろすの内ろ　源の朝むろのるとも
ちとも　ちなぐ
ちなぐ　ちなぐ
はかなしもすのありそうとも
あられとゆ弱　あられの名はねがらきんの
あれなりと名のあとれとも
ひゆねる　はかなし花るる月　相加ろ琴のん
ちて　挑すをのもろ面ね

野分

巻名以詞号之源三十六歳之八月之事也竪亜

中宮の御まへより　秋好

色々さ

くさ〳〵あらそ　皮ぬぎ〳〵するまゝ

あそこ〳〵ぬるをれい　都まと

仏り後せ所　秋の野を移して仏りをす

源ゝ西白く　善ゝあ〳〵ゝうゝる云れゝる

善秋のあゝうひよ

業第一　近江大津宮御宇天皇詔内大臣藤

原朝臣大織冠競憐春山萬花之艶秋山千葉

之彩時額田王歌判之歌　冬木成春去
くれば不覆ると雖も開花もさくれど
山をしげみとへてもとらず草ふかみとりてもみん
えび花山のまはれ葉をそめ黄葉をぞ思ひてぞ
思ふ青きをとぶ黄葉をぞ思ひてぞ
山づもれい
あをこの花　はるこの花
世もすがら　時わかぬ世のなかひとつ
も一時も一時
はるばるつゝて　中ぞけもれは宝花の事
はあるとひあるも　えぼうのはるの月なれば遊ぶ歌敬ふ

八月

八月の哀の事

吹くるよりとうける俗説の奇特をしめしに取葉
の事あり胡蝶とは蝶あるを
は遊気あるをとうにくい畫朝もなれるを
思ふきをは哀をは分まて秋の色もなくあるを
なを綿とて花ひとりぐちみるべうを
はるとうめ　中ぞはるとは一花と分ふ
志めてをひ花の
哀をはをはよりの神の神りを事

秋のそらにうつる　物の姿　春花をいろどるなかく
　　花をせるに面白
　　しとあり　此小歌　川音風を相手と意をとられまて
　　と風を待こいしいとどもあまりにかすの外よ吹を
　　いろうとぎらいれとらいのめ相をといるぶ
　　中務の云　夕雪を
　　こそうしのこ　うこいを紙ふいれを
　　え猶　高砂（ウスミヲ）梅の　むるるへ　ぶ今うりいるかにを
　　ぶ　ぶのうす
　　いろう源き　みるへの　ぶはるまで　きて源氏
　　は深き　ぶいて　あぶろけまを　ぶるるを

夕雪　此　ひ　ぶ　を
ぶ　の　ぶ　を　源氏　この　相　此　ぶ　る
いろ　ぶ　て
源の　源氏
ぶの　ぶ　て　源氏　ぶ　ぶ　の　相
今まいる　　　

ふーとと　　黄金のどうるる　ほとのたさうれど
　　にて居ます　　（所変りてこしらけ方いと）
中れん　　源の組と
三条家家　　久秀の組と　　狂毎のれ方にみるのと
ちうさるれやうに　　知をづとしらる
けよとや　　源の組
くさりもに
三条家と　　（氏源のれ方）
　　久秀のつとめる事也
　　三条家と六条院と
　　久秀の悪相の遺誡（カイ）あるもれ北（ハル）有病患（ゲン）は必
　　不（レ）渇（エツス）於親（ニシテ）若（シ）有（ス）故障者早以清水（ツ）向（ヒラ）夜来
　　之寧（ヤスキ）若（ヒラ）　札記文王世子日

知るのうりさん
くて物一ぱる
たすぐもけあ
きこと　　三条家のる
つる　　控門（ケンモン）なりしてあり
今ハ人氏ある　　縁（ニシ）ると
中すうと
こと　　俺でてあると
ありつる　　（ブキカ）
きー方ものされ
知るのはけへと
　　気（カラ）ぐも家　風鬣（ヒゲ）碧月（タダクタ）雨撰垣也
　　くぶり行ちうまれど
　　たすぐもけあきれよあやうしと
　　三条家のる
　　控門（ケンモン）なりしてあり
　　縁（ニシ）ると
　　俺でてあると
　　毛利屋
　　ほとのるる
　　こひ彩ほとのれさ海と
　　四条畷ほとるずまへてる

[illegible]るを[illegible]とよめるを[illegible]

人[illegible]まめやかなれば　夕雾八重[illegible]の人[illegible]

[illegible]

[illegible]　めせ人をとゝとゞめて

風をそ[illegible]あり　寄雨雨

何ゆゑや

をもひこゝろして

山のまより

[illegible]

[illegible]

ゆゑのこゝろ

[illegible]

源氏物

はるゝ物の[illegible]

源のこゝろ

ゆゑ[illegible]

たちのきて

[illegible]

夕雾の[illegible]

[illegible]

夕雾氏[illegible]

[illegible]

源の物

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うぶさ　うるてさ
なんなるすい　非のなさ人（い稀なると之れ
　　なれども也
　　夕雪を伝使よ来る也なり也
　　海の相
　　風の乱れ雪り合ると雨日迫
　　雪をしてと
　　夕雪の乱
　　中乱れ
　　立りていると（き人と
　　和月い御き人（迫と
　　なるべき人（迫と

四人
乱けなる　風り吹ちされると
吹くるをの風　ふるぶると
ふまけい　ふるまひ行と　絡てい絡
　　みどこ中文れ　ふるまひも立ひると乱と
　　乱れの白ひなどする人
　　人くきやに　夕雪のゆむあるにてぐると
　　伝来りの行　入角（ニヒダイ）のてめみどん夕雪い童（ドウ）乱
　　ふまけ中ける　ふれてぐ行ざると
　　伝せうそこ　海のれをつて
　　寧和乃君内伝
　　二人なり

わるくしてすぐ　　物語みどころ　行方
これをさいなんと　　はつたいてぐひもとまりぐ
そのゝ人をもみをぐれてくに藤しまさ
くすこと　　もとゝ抗めの見いてぐに藤しまさ
といふ人しる　　はつたゝ源ちりは言葉と行方
あきはをを　　源乃殿
今夏　　長谷の言葉
あやまくあへふ　　源乃殿
はつ殺くち　　はつたゝ殿へしとをあてにふと
中ゐのあさけ　　源はつたゝ人ゝ行方
見はるあい　　長谷の殿の判

えりみて　　源氏殿
ありて　　はつたゝ
殺あ殿と
ふすのすち　　源乃殿
とく引いて　　雲井殿はつたゝのす
こちよのさみて　　はつたゝ孔あるはつた地
いていて　　かめるる
大ゝに　　源の言葉すて　　ゆり行方を遣分
をびいそぐ　　孔ゝ殿殺物すり
みのこのり　　むろゝ
とゝくえみを　　月夜の中なれば

きさくと
くうかうきれと　むろくの紅
ねみつまてあくれ　源氏紅風みるあくれ
ゆふへきさくの俤よるくしるく（きと）
ゆうとしとちかく　元氏とちくのあく（きと）
きにあやしく　あくもちくとむろくの
ことひゆふなり
ちくちくなり　こまやかなるもの
中ねり　久秀こ
あやこと　久秀の不審ゆふ
ちくなれくき　年ちくゆふくなくこと

ちくりみなれ　紅のはちりはとるれてそ
ぞちゆふるかとことひゆふ
さのみこ　ゆふこと
いくあんまあちりて　むらさの方ちり源乃
出ゆふ何とんちくぞくきまあぐちりてゆふ
ちくと久秀のことひまと
ふさみゆふ
下髪よ　下髪にうびうふあくきゆふいあ
ふまくきとこ書ちりあびてそのよゆふで
ちゆふ（さとの下ト）
なよ竹をこゆふ

きびうたちりてあれあと

のんうれしき方へ　　花菖蒲八り
移ひこゝろ
かそひ川　　めりとけみどのこゝひ花菖蒲
　　子上端みもあり
中ねのトかきね　　源の勢多之
はゴおれ菖蒲せんさい　　禁中のれあゝまゝあり
　きれど停止せゝれ名ゝと
はなをゝ花菖蒲　　高氏恋歌之題文紙
　どいふゝこゝ
けたつゝもゝ　　月草のゝ之鴨頭草之
中ねみゝう　　源の親之

まゝあゝこに　　ゆゝこゝれけ方にまゝまゝと地
はさゝけよ　　夕雾の親之
とゝゝかゝぬ
いなこれい　　夕さゝの親之
　私の祝ゝとの形之
みれかゝの　　花菖蒲ゝ多ゝ形ゝ悪い形ゝみれば
　親ゝ形ゝるゝされど明ゝこゝれ方をゝこゝばゝの
みゝゝうみゝゝゝ　　ゝゝ中ゝれゝ地すゝれ夕雾れ
ゝゝ中ゝ
されゝあゝゝけゝさゝまゝて　　夕雾の奇乃
ゝつゝゝ地傷葉を学ゝく芸方学ゝゝて
花ゝゝと侵なる方れけゝゝ学ゝ地之

ゆさつき　ゆ寄りてみるより毛井戸人
の寄なるへ
かるのおねい　さみ〳〵ぬんへのうち花乃
色そり紙の色をもとの〳〵うと
さけうりはいろも　夕雪早下の紙
いろこれ紙への　ぞのいるの乳毎りて
ぬきき弟そとたられ行ぬ花をめるさ
やうの花がいづ〳〵やうにあり紙をとと見ハ
雲井乃へうるへ〳〵
又もい行ひて　見ハ別の方なるへ
ひものすけ　夕雪此歌へうり

海〳〵世行ものて
姫ゑこ〳〵海り行ぬ
みつれ花のうとも
の山吹等へ
さもありめへを
見てそまうるべき
へさてたてはせ行ものと
をそ〳〵家此
姫ゑを
の行ものなり
今ゆけはの
姫ゑこそ〳〵海り行ぬ
ゆふこれうば横むうて
ゆへ〳〵ハ夕夕よへぞそなく
なる海・海のあまりに
行ものと
三条家へをだうだ
毛井乃をうへ〳〵見ざるゆを家
内ゆ此乃

ふつゝ　夕雾のるゆ給ひ　きゝ　きれる
の所ふるり
ひうくて　高氏ゆ給ふ
ふてうる　四条の和を給ふ
むそめといふ　おそぐのゆむ　と給と
それなん　内侍の和
とや　或ア歌う弟ゝ　をかゝて　ゝ
せり　ゝ　よひ　ひみ　ゝ　や